

英國のナローボート

兒玉 稔

英國は仕事にて度々行きし倫敦ロンドンとその近郊を知るのみ。他の方面を見むと思立ち、六月妻と旅行す。途中ナローボートに乗りたり。これ細長きボートの意。彼の国産業革命直後、燃料石炭および各種製品移動の必要急増したれども當時は鐵道網未だ不完全。従ひ、運河を掘り、舟にて物資運搬す。舟は陸を行く馬か倔強なる人等に引かせしむ。

やがて鐵路各所に行き渡りて舟衰退し、運河無用の長物と化したり。時を経て、四方八方を結ぶこの運河を餘暇の樂しみに用ゐ、舟にて此處彼處訪ぬる好き者等徐々に増加、大戰の頃よりは客を取りて生業となすも出で來たり。今やその數、全英に數萬ありと。

既にして業界團體結成せられ舟の幅最大約二米、長さ約二十mと取決めて規制す。狭き運河にて擦違ひ得る幅に留め。且つ宿泊備品を置かむが爲のサイズにして、隅田川に遊ぶ屋形舟を更に細めたる程が大きくなり。我等が目には異様に細長し。

舟のみを借り自ら操船して樂しむ方法あれども、初めての我等、舟オーナーにして船頭さん役の夫妻同乗するを借る。その細君は日本人なり。

電車にて鄙びたる無人驛に到着し、彼等の迎へを得、近きに繋留せる舟まで歩き、其の儘乗込み、舳先に設へたる椅子に坐す。何がなし手を伸し指を水に入る。舟、徒歩程度の速度にて運河を進み、直きにイングランド田舎特有の緩慢なる田園森林牧場地帯に入る。風、水面を緩かに吹き、おほひかふ覆被さる木々頭上において、閒近なる岸邊の草の緑も目に心地良し。人家無く、鳥の聲のみ聞ゆ。林を抜くれば草原となり、指呼の間に羊、馬が草を食むあり。と、また林なり。朝より此處に至るまでの喧噪との差、餘りに際立ちて別世界に入りたる如し。但し、川にあらざれば流れといふは無く、水清らかとは言へず。

エンジンは長きボートの末尾にありて、その音我等に届かざる如し。白鳥、鴨等の水鳥、舟を追ひ來て餌を求め、周圍を取巻けば手近の菓子この切れを掌に乘せて食はす。かくしつ、舟、緩かに行く。

いま航するよりも高き又は低き所を行く運河に入らむには、先づ舟をロック（閘門）に入れて前後の水門を鎖し、とぎロック内の水高を増し又は減じて水面の高さを調整（水面上下は即ち舟の上下）す。その後、行くべき方の水門を開きロックを出づ。パナマ運河航行と同じ方式なり。ロックへの水の出し入れ、水門開閉は多少の力仕事なれど動力に依らず昔日同様、船頭さんこれをす。この作業を宛がはれて樂しむ客多かるらし。生來怠け者の我、話の種に一度のみ、妻は嬉々としてあまたたび數多度行ふ。妻、舵取りも委されて操船す。近づく鳥に見惚れて岸に打附けたるこそ愛敬なれ。この舟運轉免許不要なり。

運河の進路に高き山あらばトンネルを穿ち、深き谷あらば運河橋を渡して越ゆ。運河橋の航行は愉快至極なり。下の谷には今、高速道路通る。せはしなく行き來する自動車を下に見つ、我はワイングラス片手に水面を舟に坐して行く、これ我をして故も無きに頗る優越の感を生ぜしむ。

我等が二泊三日中、景色何處も同様にして綠多く、靜かなることこの上なし。退屈と言へば退屈、されど日々の變化著しきに倦む年寄には誂へ向きと言ふべし。

船頭さん夫妻曰く、ナローボートPRが爲、異例なれども三時間の短き紹介コース設けしところ、日本のさる大手旅行業者來りて、これを更に二時間に短縮すれば客數多あまた連れ來るべしとの打診あり。さなる短時間にてはナローボート神髓の一部だに紹介し得ざれば斷りたり、と。宜なるかな。

（平成二十九年七月二十四日受附）

